

# 中日評論

来る十二月五日  
に大平首相は、大  
外相ととも訪  
中する。この訪  
中。第二次大平政  
権の誕生がわが国  
政治の転歩をさら

けた。したが、首相として訪  
中を機に心機一転、新しい大平  
政治の方向を確立したいとす  
てであろう。今回の首相訪中は、  
日中間にいま緊急を要する政  
治的な懸案事項が存在しないた  
めに、「四つの現代化」政策へ  
と大きく転換した中国側の首脳  
と（ひび）を交えて話し合う  
ことにより、相互理解と日中友  
好関係の増進をはかるのが目的  
だとされている。

だが、今回の首相訪中は、ま  
さにそれが七〇年代後半期に実  
現することによって、八〇年代  
アジアの国際政治の専横を告  
げざるを得ないことは、今日の  
わが国の国際的地位を照らして  
避けられないところである。

条約の廃棄、中ソ次官級モスク  
ワ会議の進行、朴・韓国大統領  
暗殺など重要な国際的事件が相  
次いだ。これらの一連の出来  
事は、アジア・太平洋地域にお  
ける米・日・中の「反覇権」連  
合形成への衝動とそれに対抗す  
るソ連の軍事戦略の著しい拡大  
をもたらしつつ、新しい冷戦と  
しての「生ぬるい戦争 Cool  
War」のグローバルな進展を  
背景にしているといえなくはな  
らぬ。

## 厳しい国際環境の中

### 首相訪中の問題点

と好まるといがかわち、米  
・日・中の「反覇権」連合へ  
組みこまれざるを得ない国際環  
境のたまたまにある。  
従って、大平首相が、北京に  
おける演説で、このようになが  
明の軍事的なコミットメントを  
明白に拒否しようとする姿勢を  
示すことは、さしせまて重要  
な事柄であるといえ、やが  
て、明年の華国総主席訪中の約  
束をとりつける（一九八〇年）  
問題が存在する。

今日、十分に認識しておかぬ  
ならない。  
次に、首相訪中のおみや  
ぎとしての円借款供与の問題  
であるが、かりにわが国が単年  
度五百五十億円程度の金額をタ  
イト・ローンとして供与するこ  
とに落ちついたとしても総額三  
十五億ドルに及び円借款は、  
わが国としても最初のケースで  
あるだけに、そこには様々な問  
題が存在する。

中嶋 嶺雄

とである。しかも、たとえタイ  
ド・ローンであったとしても、  
中国の将来における様々な不安  
定要因からして、十分なファイ  
シビリティー（成否）が展望さ  
れないという要因もあろう。  
こうした状況のなかで、もし  
わが国が経済大国のゆえを  
もって借款供与に傾斜がまし  
い態度を見せるなら、かつての西  
原借款のように、必ずしも中国  
側の反発を招くであろう。され



は、首相の第一回外遊先  
としては、今日の国際環境からし  
ても、また、例の「環太平洋」  
構想を掲げている折からして  
も、まずオーストラリア、ニュ  
ージーランドを訪問すべきだと  
考えていた。そのことは後回し  
になってしまっただが、少なくと  
も、わが国が巨額の円借款供与  
を約束したあと、ブラウン米國  
防長官が訪中して中国への軍事  
的テコ入れが明らかになり、そ  
うした経緯のうちに第二次中越  
戦争が生じるといような、不  
吉な未来に遭遇する（と）なきや  
う、大平首相は、中国の対アジ  
ア政策全般についても率直にわ  
が国の立場を表明すべきであ  
らう。

(東京外語大教授)